

宮城県ダイバーシティ支援センター便り

宮城県ダイバーシティ支援センター主催 医学生・研修医支援セミナーの報告



宮城県医師会常任理事

宮城県ダイバーシティ支援センター副センター長

福 興 なおみ

令和6年度の医学生・研修医支援セミナーは、宮城県医師会館での現地開催とオンラインのハイブリッドで3回開催されました。第1回は2024年6月5日（水）、第2回は2024年11月6日（水）、第3回は2025年1月29日（水）で、参加人数はそれぞれ66名、53名、39名でした。全てのセミナー後には飲食を交えた懇談会を開催し、それぞれ58名、52名、35名の医学生・医師が参加しました。着目すべきは、当初は明らかに女性の方が多かったのですが、今年度の参加者の男女比は、ほぼ同数だったことです。今年度から、女性医師支援センターからダイバーシティ支援センターに名称を変えた開催側として、男女関係なくキャリアについて考えるきっかけにしているような結果で、これほど嬉しいことはありません。

3回とも宮城県医師会佐藤和宏会長の挨拶に始まり、橋本省ダイバーシティ支援センター長から本セミナーの主旨が紹介されました。センター長である橋本先生は、常々「女性医師支援センターという名ではあるものの、女性医師のみならず、性別にとらわれない医師全体の支援が目的」とこれまでのセミナーで説明してきましたが、今年度は名実ともにダイバーシティ支援ということが紹介され、その後シンポジウムと続きました。

第1回目のセミナーは、シンポジウムと特別講演で構成されました。シンポジウムでは、本支援センター委員であり、東北公済病院乳腺外科医長の佐藤章子先生の座長のもとで、お二人の医師にご講演いただきました。お一人は東北医科薬科大学病院総合診療科の専攻医である奈良井大輝先生に「どうして総合診療科なのか」という演題名で、東北医科薬科大学医学部第1期入学生としての不安や疑問を抱きながらの医学生時代、母校での初期研修中の結婚などライフイベントの中で総合診療科を選択した経緯をお話いただきました。新たに設立された基本領域ということで、医学生や研修医に大変分かりやすく総合診療科の診療内容とその魅力を伝えてもらえました。もうお一人は本支援センター委員であり、宮城県立こども病院泌尿器科の武田詩奈子先生から、「共働き泌尿器科医の一例」という演題で、4人の子育てと仕事の両立における多くの支援の大切さと泌尿器科の魅力についてお話いただきました。ライフイベントを経験する中での苦労と困難を乗り越えられているのは、泌尿器学を専門とする診療と研究への武田先生の熱意と努力により、家族・学童保育・同僚・上司・コメディカルの協力と理解を得られたからだ、と、医学生や研修医は感銘を受けたと思います。引き続きの特別講演では、本支援センター委員で東北大学病院輸血・細胞治療部准教授の藤原実名美先生の座長のもと、東北大学病院総合外科兼東北大学病院卒後研修センター助教の梅津道久先生に「今のうちから知っておくべき専門医制度について」というテーマでご講演いただきました。2018年から開始された新専門医制度の概要と、梅津先生が調査して下さった各診療科の専門医制度についてコンパクトにまとめて話していただ

きました。「多少の困難や犠牲があっても、この診療であればやっていけると自分が信じられれば、（進む診療科を）決定してよい。大切なのは自分で選ぶこと」という梅津先生のメッセージは、医学生や研修医にとって大変有益だったのではないかと思います。

第2・第3回目のセミナーでは、参加者である医学生や研修医と年齢的に近い若手医師各3名にシンポジウムでご講演いただき、その後宮城県医師会会長の佐藤和宏先生から「日本の医療を考える」というテーマで、本邦における医療費の現状と課題を話してもらいました。医学部では教えてもらえない内容に、医学生や研修医はこれまでと違った視点で医療を見直すのではないかと思います。その後、会場を変えて質疑応答と情報交換を行いました。

第2回のセミナーでは、本支援センター委員で東北大学病院輸血・細胞治療部准教授の藤原実名美先生の座長のもとで、東北医科薬科大学病院臨床研修医の向井菜々乃先生から「志望診療科を踏まえた初期研修病院の選び方」、東北公済病院産婦人科専攻医の鈴木涼花先生から「研修医夫婦の妊娠・出産」、東北大学病院消化器内科医員の畑山裕先生から「消化器内科医を目指した経緯を振り返って」と、それぞれの演題でお話いただきました。向井先生は、ロールモデルが少ない基礎系に近い病理医への進路志望ということで、初期研修選びや選択診療科では悩みも多かったとのことでした。非常にわかりやすく初期研修病院の選び方のポイントを示してくださったのは、自らの努力で病理医への進路を切り開いている向井先生だからこそと思います。鈴木先生は、研修医中に妊娠・出産、夫婦ともに取得した育休、実家や職場のサポートの中での子育てと仕事の両立の中で出てくる課題とその解決法を話してくださいました。高校生時代から抱えている自分の夢の実現に向かって研鑽を積む鈴木先生の姿は、医学生や研修医にとって刺激になったのではないかと思います。医学生時代に東日本大震災を経験した畑山先生は、東北の医療に貢献したいという気持ちで、市中病院での初期臨床、消化器内視鏡の魅力から選択した消化器内科、視野を広げるための大学院進学のエピソードを紹介してもらいました。医師同士の結婚での、夫の子育てと共働きの実際を、男性医師の目線で話してくださったことは、医学生や研修医にとって印象強かったと思います。

第3回のセミナーでは、本支援センター委員で東北大学病院輸血・細胞治療部准教授の藤原実名美先生の座長のもとで、東北大学病院小児科専攻医の諸田真莉子先生から「小児科医として、母としての働き方」、東北労災病院呼吸器内科の小笠原嵩天先生から「医師として、家族として、未来を描く：私のキャリアの道筋」、東北公済病院整形外科医長の橋本ちひろ先生から、「整形外科医になってよかったと思うこと」と、それぞれの演題でお話いただきました。諸田先生は、「今やりたいことを精いっぱいやる」ことをモットーに、専攻医中に出産した幼いお子さんを育てながら当直業務もこなしている日々とともに、小児科の魅力を紹介してくださいました。職場の理解や家族のサポートに感謝していましたが、諸田先生だからこそ周囲が協力してくれているのだと思いました。小笠原先生は、医学部時代に楽しいと思えた呼吸器内科を選択したこと、初期研修2年目の結婚・その後の育児の中で、「自分が本当にやりたいことは何か」を自問しながらの医師生活を紹介



写真1 セミナー

宮城県ダイバーシティ支援センター

してくださいました。迷いながらも働き続けることがキャリアの道筋として「正解」となる、という小笠原先生の言葉に共感しました。橋本先生は、東北労災病院での初期研修中に自由選択で選択した整形外科研修で、診断から治療まで一貫して診療できる魅力を感じたことが、整形外科医になる決断の理由だったことを紹介してくださいました。男性医師のイメージの整形外科医として、育児をしながらの市中病院での研鑽の話は、医学生や研修医にとって印象深かったと思います。

第2・3回のセミナー後は、医学生からシンポジウムの講演者に直接質問できるコーナーを設けました。第2回はみちよレディースクリニック院長の倉片三千代先生と東北公済病院乳腺外科外科副部長の佐藤章子先生のお二人に、第3回は東北労災病院呼吸器外科部長の保坂智子先生と佐藤章子先生のお二人に質問コーナーの司会をしていただきました。医学生からの質問は多彩でしたが、それぞれの講演者の先生は丁寧に回答してくださり、質問者のみならず参加者全員にとって有意義な時間となりました。年代や診療科を超えて、男女関係なく働きやすい、働き続けられる、そして自分なりのキャリアを積むにはどうしたらいいかを、先輩医師に熱心に聞いている医学生の姿に、これからの宮城県の明るい医療に期待を感じることができました。

お忙しい中、ご講演を引き受けて下さった先生方、座長の先生方ありがとうございました。そしてなにより、参加して下さる方がいなければ、セミナーは存在しません。お忙しい中、参加して下さった聴衆の皆さまにお礼申し上げますと同時に、本セミナーが明日からの皆さまの活動のモチベーション向上につながれば大変うれしく思います。



写真2 意見交換



写真3 質疑応答